

### 第三回どこでもMYカルテ研究会プログラム

テーマ 「災害時における医療・介護情報ネットワーク」--東日本大震災復興へ向けて将来医療情報システムを先取りする 「どこでも MY カルテ」の実現」

主催 どこでも MY カルテ研究会

後援 医療構想・千葉 NPO 法人医療福祉ネットワーク千葉

日時 2011年7月7日(木) 18:00-21:00

場所 東京都中央区銀座六丁目 11 番 1 号ソトコロハス館 4F

18:00-18:10

1 モデレータから： 増山茂（東京医科大学 どこでも MY カルテ研究会）

18:10-19:10 ○現場では何が起こっていたか：

座長：田口空一郎（河北総合病院 構想日本） 竜崇正（医療福祉ネットワーク千葉）

2. 東日本大震災全被害の二割を占めた石巻市

石橋悟（石巻赤十字病院救命救急センター長）

3. 壊滅した気仙沼、介護施設の目から

湖山泰成（湖山医療福祉グループ代表）

4. 南三陸の状況：医療・介護情報のあり方

西澤匡史（南三陸町医療統括本部本部責任者）

19:10-20:20 ○将来を見据えた医療情報システムとは：

座長 岡本茂雄（セントケア HD 執行役員） 溝尾朗（東京厚生年金病院内科部長）

5. 「宮城県震災復興計画（第1次案）と医療情報のあり方」

名取雅彦（野村総研公共経営戦略コンサルティング部）

6. 「医療情報化に関する総務省の取り組み」

馬宮和人（総務省情報流通行政局情報流通振興課課長補佐）

7. 「震災対応の観点から見た新医療 IT 戦略」

野口聡（内閣官房 IT 室担当 内閣参事官）

20:20-20:50 ○ 竜崇正（医療構想千葉）

8. 震災は情報空間をどう歪めたか

山根一眞（ノンフィクション作家）

20:50- 総合討論：座長 竜崇正（医療構想千葉）

■講師プロフィール：

**石橋悟**

1991年旭川医科大学卒業

1994年東北大学第2外科入局

石巻赤十字病院救急救命センター長・医療技術部長

**湖山泰成**

順天堂大学スポーツ健康科学部客員教授。湖山医療福祉グループ代表。

同グループには、全国に9の医療法人、6の社会福祉法人、4の株式会社、1つの有限会社、1つのNPO法人があり、グループ全体の従業員数は5500人を超える。

広島経済大学 特別客員教授 東京青年医会会員 財)日米医学医療交流財団評議員、スローフード ジャパン会員、東京銀座新ロータリークラブ会員

**西澤匡史**

1997年自治医科大学卒業

1997年国立仙台病院にて初期研修

2002年自治医科大学呼吸器内科にて後期研修

2003年～公立志津川病院 内科診療部長

2011年 公立南三陸診療所

宮城県災害医療コーディネーター、南三陸町医療統括本部本部責任者

**名取雅彦**

(野村総合研究所公共経営戦略コンサルティング部)上席コンサルタント、技術士(都市・地域計画)・ITストラテジスト

経歴： 1980年野村総合研究所入社後、都市・地域計画、公共経営分野の業務を中心に多数のプロジェクト業務を実施。国土計画、首都機能移転、地域振興等に係るプロジェクトの他、農林水産省等のCIO補佐官支援、公社などのIT戦略策定等、ICTプロジェクトの実績も多数有している。 本年3月11日の震災以降、震災復興プロジェクトメンバーとして、宮城県の復興計画の策定支援を担当。

論文・著書：「東北地域・産業再生プラン策定の基本的方向」「産業復興の考え方-先導的新産業拠点の形成をめざして-」(弊社震災復興プロジェクト提言第2回、第11回)、『電子自治体経営イノベーション』(ぎょうせい)、『食品産業のグローバル戦略』(ぎょうせい) 他多数

**馬宮和人**

現職：総務省情報流通行政局情報流通高度化推進室 課長補佐

経歴：2002年大学院中退後、総務省に入省、地上テレビ放送のデジタル化の普及推進に携わる。

2005年4月より、内閣官房副長官補室に出向し、郵政民営化等の実現に向けた、政府・与党の調

整を行う。その後、2008年5月より、総務省地域通信振興課において、光ファイバ等のICTインフラの整備支援、ICT利活用の促進に努め、2010年7月より、現職において、医療の情報化（遠隔医療のエビデンス収集、疾病管理の効果測定、日本版EHRの実証事業の執行管理等）に取り組んでいる。

## 野口聡

現職 内閣官房 IT 室担当 内閣参事官

1989年3月 東京大学工学系研究科（博士課程）航空コース終了

1989年4月 通商産業省（当時）入省（宇宙産業課配属）

その後防衛庁（当時）、JETRO（日本貿易振興機構）ニューヨークセンター勤務などを経て  
2007年7月 経済産業省商務情報政策局情報プロジェクト室長  
2009年7月 から現職

## 山根一眞

ノンフィクション作家 獨協大学経済学部特任教授

<http://www.yamane-office.co.jp/profile.html>

1991年から2007年まで17年余、約800回にわたった週刊誌連載「メタルカラーの時代」では、日本の「モノづくり」に携わる人々の仕事と人生をいきいきと描き続け「モノづくり」への関心を高めることに貢献。

1997年4月、低炭素化社会目指す新産業の創造を「環業革命」と命名、その進展で活力ある経済振興をと訴える講演活動は500回を超える。「環業革命」は2005年日本国際博覧会・長久手愛知県館や「名古屋メッセ2006環業見本市」（2006年11月）でもテーマに採用された。

宇宙航空研究開発機構（JAXA）嘱託、福井県文化顧問、月探査に関する懇談会委員（内閣府）、生物多様性戦略検討会委員（農林水産省）、日本生態系協会理事、NPO 子ども・宇宙・未来の会（KUMA）理事、北九州マイスター選考委員。共用品推進機構、日本聴導犬協会、大宅壮一文庫などの各評議員。2001年北九州博覧祭北九州市出展「ものづくりメタルカラー館」プロデューサー、2005年日本国際博覧会・愛知県総合プロデューサー、国民文化祭ふくい2005・総合プロデューサーなどを歴任。日本文藝家協会会員。

著書に、10年にわたる取材成果をまとめた『環業革命』（講談社・韓国でも翻訳出版）『アマゾン入門』『東京のそうじ』『モバイル書齋の遊戯術』『デジタル産業革命』『山根一眞の素朴な疑問』『賢者のデジタル』、『小惑星探査機はやぶさの大冒険』、『小惑星探査機はやぶさの大冒険・電子ブック版』など多数。

## 解題：

「第3回どこでも MY カルテ研究会」を開催します。2010年07月29日の第1回、同年09月30日に行われた第2回どこでも MY カルテ研究会に引き続くものです。

「シームレスな医療連携の実現」と「どこでも MY 病院構想」という2つの軸を実現する医療介護情報 IT 化国策の推進に、多くの医療関係者・IT 技術者・政策担当者・自治体関係者・情報教育関係者・ジャーナリスト・患者団体などにご参加いただき活発な論議をかわした、この2回の研究会は幾許かの貢献をしたはずです。

第2回と第3回の間長い時間が生まれてしまったのは、そうあの3・11のせいです。2011年3月11日14時46分に宮城県沖にて発生した、869年観地震以来と目されるM9の大地震が巻き起こした巨大津波は、東日本の太平洋沿岸を300kmにわたり洗い流しました。被害は甚大であり、今もまだその復旧の途上にあります。

被災現地支援に全く無関係であったこの研究会関係者を捜すのは難しい。どこでも MY カルテ研究会のテーマは、大きな意味では医療の IT 化を考えることであり、具体的には電子カルテの現状と問題点を地域中核病院・クリニック・薬局・介護施設・在宅者の立場から問いかけることであり、これらを解決可能な技術開発の道筋を探ることでした。

しかし、この面から言うと、あの3・11とそれに引き続く医療をめぐる大混乱は、残念ながら、我々の努力の具現化があつた地域において間に合わなかったことを示します。翻訳すれば、「どこでも MY 病院があれば」、「なぜシームレスな医療連携をしていなかったのか」、となる問題点を現地の心ある医療関係者から以下のように聞かされたものです。

- ・個々の医療機関に閉ざされていた紙やスタンドアロンの電子的な個人の健康・医療・薬剤情報は、流されたり燃えたり完全に破壊され消失した。医療情報の閉鎖性・孤立性が問題となった。

- ・たとえ、医療情報が断片的に残っていたとしても、被災者本人が自分の健康・医療・薬剤情報を正しく知る方法がなければ、意味のある情報ではない。特に、高齢者や小児のみの場合に顕著で、情報の非可搬性が問題となった。

- ・災害を生き残った被災地の医療機関であっても、非被災地の医療機関の情報へアクセスが出来ず、被災者の方々の健康・医療・薬剤情報を正しく利活用することが出来なかった。情報連携が無く分断されている事が問題となった。

- ・初期の復旧時においては、全国からボランティア支援の為に集まって来る医療関係者間において、被災者の方々の健康・医療・薬剤情報の授受が困難となった。情報の電子化フォーマットもまちまちであり、ボランティア医師の次に来る医師が分からない等、情報を誰に引き継いで良いのかも定まらない。情報の非共有性が問題となった。

- ・復旧が進み仮設住宅などへ被災者の方々が移る場合、避難所等にて蓄積した情報があつても、被災者ご自身の健康・医療・薬剤情報の継続が困難となってしまう。移転先にてゼロから情報を蓄積し直す結果となり、情報の非継続性が問題となった。

- ・健康・医療・薬剤情報の課題としては、情報の電子化及び電子化フォーマット基本部分の統一性や、情報が関係者間にて共有出来ない孤立性、分断性が上げられる。更には、誰の健康・医

療・薬剤情報なのか、情報の授受や追加等を行った医療関係者の本人認証を含む情報の信憑性や可搬性にも課題が存在する。

福祉介護領域でも次のような問題点が露呈した。

震災により崩壊した介護施設とその利用者の緊急対応は多くの個人団体自治体の献身的対応により行われたが、取り残された例も少なくはない。医療との連携が断ち切れ、生命の問題につながった例も見られる。

避難所でのこれらサービスを利用者にみられる生活不活発病対策として、ボランティア等による避難生活のストレスの軽減、PTSDの予防、高齢者の身体・認知機能低下の予防の取組がなされている。中越地震の経験の基に制定された介護サポート拠点を仮設住宅に設ける試み一部でなされているが、行政・医療・介護の連携が更に求められる。

ライフラインが寸断され取り残された在宅高齢者の医療・介護対応は、中核病院・在宅支援診療所・訪問看護介護施設が、ICTに支えられた有機的な訪問診療チームを編成することにより可能にすべきである。

第3回研究会では、災害時における医療ネットワークを取り上げました。

震災現場の先生方（地域中核病院から介護施設まで）から生々しい現状をご報告いただくと共に、これらをシームレスに連携しつつ震災復興に結びつけてゆく道筋をシステム構築の領域から考え、実際の地域復興計画に活かしてゆくことができたら、と考えます。国のレベルでいうと、総務省担当官の生の考えもお聞きできる貴重な時間となるでしょうし、内閣官房IT室担当 内閣参事官野口聡氏の「震災対応の観点から見た新医療IT戦略」は、この研究会をサマライズするものと期待されます。

モデレーター 増山茂（東京医科大学 どこでもMYカルテ研究会）